

●マイハート		
◇ Make Game Change!	國中 均……	2
●連載／教育一語		
⑩故きを温ねて、新しきを知る	新宮弘識……	3
●特集／改訂に乗せた思い		
◇道徳教育の課題と『ゆたかな心』改訂の方向	上杉賢士……	5
◇平成 26 年度改訂～おすすめポイント～	……	7
◇【実践報告①】進取・工夫の向こうにあるもの	川口 陽……	9
◇【実践報告②】自分の生き方に重ねられる道徳授業をつくるために	加藤宣行……	11
◇【実践報告③】資料の力で授業がかわる。子どもがかわる。	竹井秀文……	13
●連載／情報モラルと道徳		
◇資料とのコラボを考える	北川 忠……	15
●連載／「人間関係づくりの演習と道徳⑦」		
◇「あいさつって なあに」から	松田憲子……	16
●連載／心に残る道徳授業		
◇感謝できる人間になるための道徳授業	加藤宣行……	17

本文中の勤務校は平成 25 年 9 月現在のものです。

絶賛発売中！

道徳授業ハンドブック

～道徳の“内容”をどのように考えるか～



道徳の内容項目を、わかりやすく解説！
ねらいを明確にもって授業に臨めます！

■新宮弘識 著

■定価 477 円＋税

■A 5 判／ 64 ページ

※市販はしておりません。購入については
下記にお問い合わせください。

03-3262-3270 光文書院 営業部

■小社 HP（「お問い合わせ」コーナー）などを通して「子どもの道徳」へのご意見・ご感想をぜひ
お寄せください。



Make Game Change!

～未来は自分たちの手で創るもの～



宇宙航空研究開発機構 (JAXA) 教授 國中 均

子どものころから、物を作ったり、電気工作をしたりするのが好きでした。小学生のときに望遠鏡を買ってもらって、カメラと組み合わせて金星や月の写真を撮っては、自分で現像していましたね。高校では天文観測部に入って、宇宙技術にさらに興味を深めていきました。そして、大学院時代の先生の影響で、宇宙工学のスペシャリストになろうと心に決めました。さまざまな先生方との出会いが、今の自分につながっているんだなあと思います。

小惑星探査機はやぶさに搭載したマイクロ波放電式イオンエンジンの開発には、20年以上の時間がかかりました。2010年に、はやぶさが帰還したことで、ようやくこのエンジンの実力を宇宙で実証することができたのです。新しい領域に挑戦していた私たちに対し、周囲は大変批判的でした。何度もくじけそうになりましたが、自分たちの技術に自信をもっていたので、最後までやり通すことができたのだと思います。

一つのものごとを達成するためには長い時間がかかります。宇宙用エンジンの分野では、アメリカが30年も先行していました。そのアメリカを追従するのではなく、自分たちの創意工夫で世界初のエンジンを開発したいという、熱い思いがありました。遅れているということは、不利なことばかりではありません。先行している研究をもとに、新しい技術を取り入れて開発できるからです。そして、劣勢を跳ね返し、ついに完成したのが、世界初のイオンエンジンなのです。宇宙を航海するエンジンは、寿命が長く信頼性の高いことが、重要なポイントです。打ち上げてしまったら、故障しても、もう手が届きません。だから、最大限のことをして、全部やりつくしたうえで、それでも私たちの想像を超えて難しいことが起きてエンジンが壊れたとしたら、それは仕方ない……と思えるところまで自分は努力しつくしたのかと、自問

しながら、開発にあたっていました。

また、どんな機械も、完全なことはありません。小惑星への往復には、エンジンは3台で充分だったのですが、バックアップで1台追加しました。また、エンジン同士をダイオードでつなげて、途中で不具合があっても、運航が続けられる工夫を加えました。

残念ながら、エンジンをはじめ、さまざまな故障に見舞われ、あれだけ作りこんだものが、完全ではないことが、明らかになりました。ただ、世界初の挑戦だったので、人間の想像力をはるかに超えた領域がそこに待っているのです。故障しても仕方がない難しい場面のなかで、みんなで努力して、工夫して、解決して、その結果、帰還できたということです。想定外を想定した、その創意工夫が生きて、本当に良かったと思います。

子どもたちには、たとえ狭い領域であってもかまわないので、一つの領域のスペシャリストを目指してもらいたいと思います。そして、常に新しい分野、新しい領域に挑戦し、新しい世界を創ってもらいたいと思っています。

たとえば今、周りの大人が未来はこうなっているよと言うかもしれないけれど、それは百も千もあるかもしれない未来のほんの一つの例でしかありません。それは本当の未来ではないと思います。時間はかかるかもしれませんが、努力して、その結果創ったものが、本当の未来なのです。つまり、未来は決まっています。自分たちの手で明るい未来を創っていきましょう。……そんな気持ちをぜひもってもらいたいと思います。(談)

くになか・ひとし

1960年愛知県生まれ。工学博士。専門は、電気推進、プラズマ工学。世界初のマイクロ波放電式イオンエンジンを開発し、はやぶさの帰還に貢献。現在は、はやぶさ2プロジェクトマネージャーも務める。

※はやぶさ帰還については、「ゆたかな心」5年の新資料「帰ってきた、はやぶさ」に掲載しています。

※國中教授から子どもたちへのメッセージ動画は、教師用付録DVD『デジタル道徳』に収録しています。

故きを温ねて、

— 道徳の教科化を

淑徳大学名誉教授

1. はじめに

平成25年、道徳の教科化が胎動し、道徳教育は重大な時期を迎えている。

道徳の教科化は、人間のよさに向かう心の教育の中核を担う道徳教育は重要であるといいながら、実際は知育に力点を置いて道徳教育を軽視しがちな学校教育の現状を憂慮し、子ども全員に道徳の教科書を持たせたり、教員養成大学における道徳教育を充実させたり、道徳教育の評価を施行したりすることによって、道徳教育の充実を図ろうとするものであろう。これは、行政的観点から、道徳教育の充実を図ろうとするものであり、大切な観点であるといえようが、同時に、教育的観点からこの課題を考えることも大切である。

そこで私は、「故きを温ねて新しきを知る」という観点に立って道徳の教科化を考えたいと思う。ところで、温故知新については、『教育研究』平成17年11月号で私見を述べているから、本論は、そのⅡになることをお断りしておく。

2. 故きを焚きつめて「エクス」を明らかにすれば、新しい道がみえてくる

温故知新は、『論語』の「故きを温ねて新しきを知る。もって師となるべし」の一部である。これは教師の資格の一つとしての孔子の言葉である。この句の大意は、「古い事例に熟知していると新しい事態が分かるようになる。そうでこそ、人の師となれる」（『論語』春秋社・原富男）である。これは、故いことと新しいこととを関係的にとらえ、古い事例と新しい事態には一貫している基本的なものの見方考え方がある。だから、古い事例の基本は新しい事態の基本として活用できるという意味を含んでいる。

このことに関して、吉川幸次郎は『論語』（朝日新聞社刊）で「温は、肉をとろ火で焚きつめてスープをつくることである」と語源学家的説を紹介している。

故いことを焚きつめていけばエクスが残る。その歴史のエクスが新しいことを考える上で役に立つ。とすれば、そのエクスは、不易なる遺産ということになる。

道徳教育における不易なる歴史のエクスは何か。過去における道徳教育を温めて歴史のエクスを明らかにし、そのエクスから道徳の教科化を考えてみよう。

3. 三つの歴史のエクスから道徳の教科化を考える

①、徳目主義の反省に立って、徳を層的構造的に捉えた道徳の教科化を考える

第1のエクスは、徳目主義批判という教育的遺産である。

徳目は、徳（努力・正義・勇気・思いやり・規則尊重等の徳）を並べたものであるが、徳目主義は、これらの徳を一つずつ教材配列の単位として、系統的に教えようとするものである。明治23年に発布された『教育勅語』に示された徳目の、理解と実践に重きが置かれた徳目主義教育は、昭和20年の終戦まで続くが、明治37年3月の『教育研究』では、徳目主義について、つぎのような批判がなされている。

- ・徳目は具体的な生活を抽象してつくられているから、形式的画一的になる。
- ・徳目相互に矛盾が生じ、一つひとつの徳目を身につければよい人間になるとは思えない。
- ・知的な教育になるとともに、形式的な偽善者をつくることになる。

ところで、現行の学習指導要領道徳の内容を便宜上、思いやり・親切、正義・勇気のように徳目の形で表記することがある。このように表記すれば、それぞれの項目の一つひとつが独立しているように理解され易く、その結果、徳目主義の轍を踏む危険がある。

新しきを知る

歴史的エキスから考える ―

新宮 弘識



道徳の教科化に当たり、徳目主義批判という歴史的エキスを生かし、学習指導要領の内容に示されている一つひとつの項目を一連の文脈の中で読み、それぞれを目に見える表層としての行為とその行為を生む目に見えない深層としての心から捉えると共に、いくつか内容の項目が相互に関連し合って人間のよさ（道徳的価値といってもよい）をつくり上げているという観点から構造的にとらえて教育する必要がある。

このような道徳の授業を構築しなければ、どれほど教科化を進めても現状と大同小異であろう。

②、道徳の時間の特設以来の、二つの道徳教育論を調和させた特別教科を考える

昭和33年に道徳の時間が特設される以前は、生活指導や社会科で道徳教育が行われていた。これを「生活主義」と呼んでいたが、その成果が疑問視され、道徳の時間が特設された。この歴史は、二つの道徳教育論に要約することができる。

その一つは、人間のよさは、生活上よいと言われていることを生活の中で学ぶことによって磨かれるとする教育論である。これは、生活主義・経験主義に立つ教育論であり、道徳教育を学校教育全体で行おうとする教育論は、これに属する。

二つは、人間のよさは、人間のよさを教えることによって磨かれるとする教育論である。これは、教科主義・計画主義に立つ教育論であり、道徳の時間を特設して行おうとする教育論であり、道徳の教科化もこれに当たる。

ところで二つの教育論には一長一短があり、二つの道徳教育論を生かし合ってこそ道徳教育は成ると考える必要がある。平成20年の学習指導要領の改訂では、両論を調和させたところに道徳教育を位置づけたのであるが、これは英断であり、道徳教育の歴史的エキスを見事に生かしたものであるといつてよい。

今回の道徳の教科化に関しては、従来の教科と

は異なり、二つの道徳教育論を調和させた歴史的エキスを生かした特別教科として位置づける必要がある。

③、形を通した心の教育を再評価した教科化を考える

『論語集註』に「外を制するは、内を養うなり」という程子の言葉がみえる。これは、容貌（立ち居振る舞い）・顔色（顔つき）・辞気（言葉遣い）等の形を整えることによって自分の心を治めることができるという意味である。このような形を通して心を育てようとする教育は、日本の伝統的な教育の特長の一つではなかっただろうか。

剣道では、「礼によって始まり礼によって終わる」という。礼の形を繰り返しているうちに、敬とけじめという礼の心を身につけるのである。茶道でも、道具の取り合わせや立ち居振る舞いなど、細かな形がある。その形をなぞっているうちに、和敬清寂という茶の心や亭主と客との一期一会をわが心に養っていくのである。完成された形は美しい。文化を「心を飾る」というが、形は文化である。

戦後60年、美しい形に入れることによって美しい心を育てる教育を敬遠してきた結果が、今日の心の喪失につながっているように思われる。道徳の教科化に際して、外を制して内を養う教育的エキスを再評価したいものである。

以上、道徳の教科化において、三つの歴史的エキスを生かすことの大切さについて述べたが、これ以外にも、「教えるべきことをきちんと教える道徳教育」「五段階教授法を始め様々な教育法が定着しなかった過去の反省を受けた型にとらわれない道徳授業」等の歴史的エキスがあることを指摘しておきたい。

『論語集註』：朱熹（朱子学の祖。1130～1200年）によって書かれた『論語』の注釈書。

道徳教育の課題と 『ゆたかな心』改訂の方向 ～「こころ」と「ちから」を育てる～



いいづな学園グリーン・ヒルズ小中学校
校長

上杉 賢士

山の中の小さな学校で

4月から、長野県飯綱高原にあるグリーン・ヒルズ小中学校で校長として仕事をしている。

創立9年目の若い学校で、全校44名（平成25年7月現在）という小さな学校である。標高1150mほどの位置にあり、通勤にはざっと800mほどの高低差を上り下りしなければならない。大学教授を途中で辞して、私は2代目の校長として採用され、ここでの仕事を自分のラストキャリアと位置づけている。

4月。担任の代わりに中学生と授業をさせていただいた。ネタは、海外の学校で見つけた2種類のルールの例である。

ある学校には、「廊下を走るな」「汚い言葉を使うな」「階段の手すりをすべるな」などの禁止用語を羅列したルールが貼ってあった。

別の学校は、「穏やかに話し、しっかり耳を傾けよう（Speak kindly and listen to others）」「自分が他の人にしてもらいたいと思うことを他の人にもしてやろう（Treat others the way you want to be treated）」などという、かなり趣の異なるルールを掲げていた。

むろん、中学生だから、英訳から取り組ませその意味を確認した。

「私が見てきた範囲でいえば、二つの学校にはそういうルールが必要な事情があった。それでは、みんなは自分の学校をどちらにしたいと思うか」これが中学生に向けた私の唯一の発問だった。中学生たちは、「いずれかの時期にポジティブ・ルールでいける学校にしたい」と誓った。

平日の昼間という時間帯だったが、新校長の授業という珍しさも手伝ってか、多くの保護者の方々が参観にきてくれた。



グリーン・ヒルズには、前から司法委員会があった。これは、生活上のトラブルをできるだけ自力で解決をさせようという教育的意図によって組織された。その司法委員会は、トラブルが発生する度に、その再発を防ぐためのルールを作った。私が赴任した段階では、A4判用紙数枚にびっしり禁止事項が書かれたルール集があった。

6月。私の授業を受けた中学生2人が中心になって、そのルール集の改訂に取り組んだ。彼らの目標は「ネガティブ・ルールからポジティブ・ルールに変更しよう」というものだった。その努力の結果、たとえば「私たちは、自分たちのことは自分たちで進んで考え決めます」のようなわずか4項目にまとめられた。これは、「グリーン・ヒルズ宣言」として、全校一致で採択された。

2学期が始まって2日目。司法委員会はその役割を終えたために発展解消となり、新しく組織された「グリーン・ヒルズ会議（全校集会の発展型）」に引き継がれることになった。最後の司法委員を務めた子どもたちは、「自分たちが学校の歴史を変えた」と胸を張った。

光文書院の『ゆたかな心』には、同趣旨の資料がいくつも収載されている。「心の優先席（3年）」「どっちがいいか（4年）」「いらなくなったきまり（6年）」などである。

子どもは空っぽの容器ではない

私たちは、子どもたちの健全な成長を願って教育という仕事に携わっている。しかし、いつのころからか、教育を名目にした大人の働きかけは力ずくのような様相を呈し始めたように思う。

この指摘をにわかに了とする方は、おそらくそれほど多くないだろう。しかし、私たちは「善いことをたくさん教えれば子どもは立派に育つ」などと安直に考えてこなかっただろうか。

このところさまざまな研究的な知見が集約されて、どうも子どもたちの育ちはそれほど単純ではないというような見方が広がった。

たとえば、小学校に入りたての1年生だって、短い人生とはいえそれなりの感性や考え方をもちあわせている。家族と暮らし、幼稚園や保育園の仲間と過ごした結果、周囲とどのようにすればよい関係が築けるかについてはうすうす分かっている。つまり、大人から見ればいかにも稚拙に映るかもしれないが、それぞれの段階でそれなりの価値観は形成されている。

教育という仕事は、無知で白紙で何にも知らない対象を相手にするのではない。それなりに形成された価値観の上に、いわば「上書き」するようなものだ。だから、当然のことのよう、「教えたこと＝学んだこと」にはならない。だから、同じことを教わったとしても、同じことを学ぶとは限らない。子どもは、決して空っぽの容器ではないのである。

このあたりの事情に気づいたころから、教育に対する捉え直しが始まった。その象徴が、「構成主義パラダイム」への注目である。

「構成主義」とは、学んだことを自分のなかで構成し直すことによって初めて学ぶ意味が生じたということを意味する。「パラダイム」とは、特定・個別の理論や主張を指すのではなく、大きく括る枠組みのことを指す。

この考え方に立てば、私たちは、善いことをたくさん子どもの頭の中に放り込めば教育の仕事は終わりと考えてはならない。問題は、子どもたちが授業で知ったことや分かったことが、その後どのように受け入れられ、それがあらかじめもっていた感性や価値観とどのように混ざり合って再構成されたかに関心をもつべきである。

「こころ」と「ちから」を育てる

「道德教育の目的は心を育てることにある」という命題に、私はいささかの疑念もたない。その一方で、「心」という実体の分かりにくい部分を教育のターゲットにすることから生じる大きなジレンマを抱えてもいる。

このジレンマを解消するひとつの方法として、「心」と「力」を併記するという着想をした。

「心」とは、内的な状態である。「力」とは、外側に向かって表現される行動である。この両者は密接につながっていて、心は力として発揮されることがしばしばあるが、心のすべてが力として発揮されるわけではない。

古来、人間の心的な構造を「知・情・意」と表現してきた。これらもまた密接なつながりがあるという前提で敢えて分割すれば、「心」は「情」に、「力」は「知」と「意」に相当するだろうか。

むろん、これらを分割して一つひとつを別個に育てれば完成するわけではないが、私たちが「心の教育」を主として「情」に重点をおいて考えてきたことの反省にはなり得る。そして問題は、心の教育において「知」や「意」に対して、どのように光を当てるかという点に行き着く。

光文書院の『ゆたかな心』は、この「心」と「力」の両面において子どもたちの育ちを保証することを基本方針として編纂されている。

具体例の第一は、「ねらい」の表記である。

子どもの学びは、授業のなかで提示されるさまざまな事象や事実を知ることから始まる。その知ったことや気づいたことは、何らかの形で感情に影響を与える。そして、私たちの願いとしては、感情の動きが「できる」「しようとする」という意思や行為にまで発展してほしいと思う。ねらいを層的に表記したのは、子どもたちの変化や成長にきめ細かく寄り添いたいと思うからである。

具体例の二つ目は、子どもたちに期待する心と力の態様を展開欄に示したことである。もちろん、その出現の仕方は多様であるが、私たちは豊かな学びを保証することに専心しながら、その働きかけが子どもたちに心と力の両面にわたってどのような成長をもたらしたかを確かめずにはいられない。その結果をまた次の段階の指導に反映させることを通して、より大きな効果を生みたい。

平成 26 年度改訂 ―おすすめポイント―

平成 26 年度版『ゆたかな心―新しい道徳』のおすすめポイントです！

1 新資料

今を生きる子どもたちにぜひ考えてほしい資料を、新たに選定し掲載しました。
その一部をご紹介します。

1年

もうすぐ ニねんせい

大好きな先生がいてくれるから、学校が好き。
愛校心を考える温かい資料です。

<4-(4)愛校心>



2年

とりの たまご ージャン＝アンリ・ ファーブルー

自然とのつきあい方を
幼少期のファーブル
から学びます。

<3-(2)自然愛>



3年

お母さん、 かぜでねこむ ーちびまる子ちゃんー

「ちびまる子ちゃん」の
お話から、家族愛につ
いて考えます。

<4-(3)家族愛>



4年

石油列車、東北へ 向かって走れ！

震災直後、石油を東
北へ運ぶために奔走
した人々の実話です。
<2-(9)尊敬・感
謝>



5年

ホペイロのヤマさん

サッカーチームの縁の
下の力持ち、ホペイロ（用
具係）のヤマさん。彼が
仕事をがんばる理由と
は……。

<4-(3)社会的役割の
自覚と責任>



6年

温かいおまんじゅう

礼儀ってなんだろう？
今だからこそ大切にし
たい、大切な心を学び
ます。

<2-(1)礼儀>



2 デジタル道徳

ICTを使って、道徳の授業を一層深められないか—そのような思いから開発しました。
さし絵・朗読・動画など、道徳の時間に役立つ素材が盛りだくさんの教師用付録DVDです。

さし絵

朗読

動画



▲資料のさし絵を画面に映したり、印刷して掲示したりすることができます。



▲資料に関連する動画（資料映像やインタビューなど）を教室で視聴できます。

3 充実のコラムページ

「情報モラル」「人間関係づくり」など、現代の課題に対応したコラムを体系立てて掲載。
各学年の最終ページには、心に残る「名言」を、資料と関連づけて紹介しています。



▲情報モラル



▲人間関係づくり



▲名言「ことばのたからもの」

大好評！重点主題

大好評の「重点主題」。同じテーマで複数の資料を用い、続けて学習することによって、学習を深めます。

（3年生の例：自他の生命を尊重する）



3時間目

18 ぼくは何を
【主題名：命を輝かせる】

2時間目

17 いただきます【主題名：元気のもと】

1時間目

16 いのちのまつり【主題名：命のつながり】

「進取・工夫」の向こうにあるもの ～「帰ってきた、はやぶさ」を使って

大分県中津市立沖代小学校 川口 陽



1. はじめに

「帰ってきた、はやぶさ」〈1-(5)真理・進取・工夫〉は、新しく『ゆたかな心』5年(光文書院)に掲載された資料です。その資料で、自分が担任する6年生の授業実践を行いました。その様子を報告させていただきます。

2. 主題のねらい

「はやぶさ」の帰還に大きく影響した國中均教授の言葉の意味や、その言葉の裏にある思いについて考えながら〈1-(5)〉のねらいに迫っていく授業を目指しました。

3. 授業の様子

(1)授業展開

「はやぶさ」や國中教授の写真から、資料に対する興味をもたせ、資料に出合わせる。

感想を出し合わせ、発問へとつなげる。

イオンエンジンって
どんなエンジンだろう

國中教授は独自のものを
創ってすごいなあ

発問：國中教授が開発を続けられたのはなぜかな。

見返したい

最後まで
やり抜こう

未来のために、独自の
ものを創りたい

発問：「未来は自分の手で
創るもの」という言葉に
は、國中教授のどんな思
いがあるのかな。

失敗しても自分で挑戦したり、工夫したりして、
未来を自分で創ることが大切。

発問：自分や学級の未来のために大切なことは何かな。

自分のよりよい未来を創るために、自分で考えたり工
夫したりすることが大切なんだ。

(2)資料に出合わせる前

まず、下の写真を黒板に提示しました。ニュースなどで、はやぶさを知っている児童も多く、非常に興味・関心が高まりました。

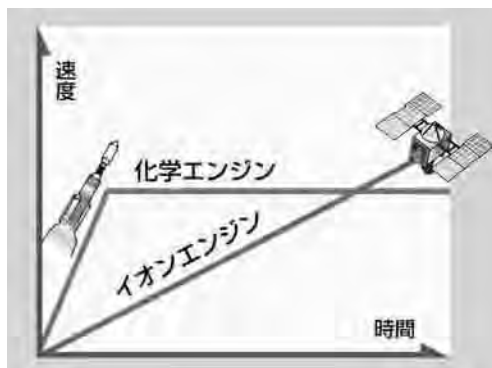


次にイオンエンジンの開発者・國中教授の写真を提示しました。子どもたちの目を、はやぶさだけでなく、はやぶさ帰還成功の裏にある、開発者の國中教授に向け、よりスムーズに課題を位置づけるためです。

その後、初めて資料を配布しました。

(3)資料との出会い

資料配布後、掲載されている写真やグラフを用いながら、資料の概要をつかませました。



(4)感想から課題へ

話のあらすじをつかませた後、感想を出し合わせると、最初は「はやぶさ」のことについて述べていましたが、次第に國中教授のことを話題に始めました。そこで、最初の発問を行いました。

T：周囲に期待されていなかったにも関わらず國中教授が開発を続けられたのは、なぜだと思いますか？

C：「使い物にならない」とか「アメリカのものを使えばいいのに」と言った人たちを見返してやろうという気持ち。

子どもたちは「周りの人たちを見返したい」や、「努力する大切さ」と言う視点で國中教授の気持ちを捉える傾向にありました。

(5)課題から授業のねらいへ

そこで、〈1-(5)〉のねらいに迫らせるために、「未来は自分の手で創るもの」という國中教授の言葉に着目させました。また、ダイオードでエンジン同士をつなぐ工夫をしていた場面を扱い、その工夫や努力を生んだ「もと」となる思いについても、考えさせていきました。

T：國中教授は最後に「未来は自分の手で創るもの」って言ってるよね。イオンエンジンの開発をしたときのどんな思いが、この言葉につながったのかな。

C：他人の技術をまねせず、自分で考えないと得るものは少ないってことを知ってもらいたかったのかな。

など、「努力」という考え以外に、「人のものをまねせず、工夫することが大切」などと、少しずつねらいに迫る考えが出てきました。そこで「大きな目標のために、研究を20年も諦めず、努力したからこそ、『はやぶさ』は成功したのだけど、そこには國中教授の『人のものをまねせず、自分の手で』という思いや工夫があった」ことを確認しました。

(6)自分の生き方とつなぐ

最後に、自分の生き方とつなぐために、「自分や学級の幸せな未来をつくるために、大切なことや自分にできそうなことはなんでしょう」と問いかけました。

C：他の人が言うことをすぐのみこむのではなく、

自分の考えをはっきりと言え、自分のレベルアップにもつながる。今自分でできる限りのことをすることが大切だと思う。

C：「だれかがやってくれるだろう」ではなく、きちんと目標を立てて、自分の未来は自分で創ろうと、自分で考えたり工夫したりすることが大切だと思う。

などといった考えが出されました。



◀子どもが
考えを書いた
ワークシート

4. まとめ

子どもたちは当初、「見返したい」「最後までやりぬきたい」といった、ねらいとは離れた考えをもっていました。「見返したい」という考えは、「イオンエンジンなど使い物にならない」という言葉に反発したり、それを言われた國中教授に同情・共感したりという子どもが多かったからであると考えます。

また、「最後までやりぬきたい」と考える傾向にあったのは、子どもたちが日頃から、「最後までやりぬくことや努力することの大切さ」に触れることが多いからではないでしょうか。学校行事や学級指導の中でも、扱われることが多いと思われます。

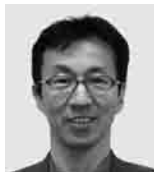
このように考える傾向がある子どもたちを、ねらいへと迫らせたものがありました。それが、國中教授の、「未来は自分の手で創るもの」という言葉と、「エンジン同士をつないでおいだという工夫のすばらしさ」、そして、その背景にある、「高い目標への意識」でした。

この資料を通じて、子どもたちは、目に見えるすばらしい「進取・工夫」の向こう（背景）には、開発者のどのような思いがあったのかが分かり、自分たちも、そのようにしたい（なりたい）という感想をもつことができました。ぜひ先生方の教室でも、子どもたちと一緒に追求していったほしいと思います。

自分の生き方に重ねられる道徳授業をつくるために

～新資料「世界一うつくしい体そうをめざして―内村航平―」の実践から～

筑波大学附属小学校教諭 加藤 宣行



1. 新資料を使って

光文書院『ゆたかな心』の新資料として、2012年のロンドンオリンピックで金メダルをとった内村航平選手の話が掲載されている。私の担任する4年生に、この資料を使って授業をした。



2. 授業の実践

授業で取り上げたテーマ（発問）は、「なぜ内村選手は世界一美しいと言われる演技をすることができるようになったのか」である。「才能があった」「努力した」だけではない、何かがあるはずである。そのような教師の問いから、子どもたちは「自分の特徴には長所も短所もあり、そのどちらもレベルアップさせていく（短所は補い、長所は磨き伸ばす）ことが大切だ」ということに気づいていく。

このように、資料を通して考えさせたいテーマを基に発問を考え、授業を作り上げることが道徳授業においては大切である。

授業後、T君が次のようなことを道徳ノートに書いてきた。

「内村選手、カッコいい！」

みんな、3年生までカッコいいという言葉の本当の意味を知らなかった。知っていたのかもしれない。でも本当の「カッコいい」を使うときがなかったと思う。でも今日、その本当の「か

っこいい」を使うときがきたのだ。

苦手をみがく。得意をさらにみがくことが大切でした。

ぼくの苦手は考えることです。このまま、ぼくの苦手をほったらかしにして6年生になっていいのか。このことを考えて6年生になってみせます。

T君が言っている「カッコいい」というのは、単なる表面的な演技のカッコよさではない。「世界一美しい」と誰もが思うまでに磨き上げた、内村選手の生き方を指しているのである。

すでにおわかりかもしれないが、子どもが変わる授業の勘所は、目に見える表面的なものにとらわれず、いかにして目に見えない深層的なものに気づかせることができるかである。そしてそれができると、子どもたちは自然に自分自身の生き方に重ね、前向きに取り入れていこうとする。つまり、子どもが変わるのである。

そのような授業をするために必要なことは何であろうか。ポイントは次の3つである。

- A 「何を学んだのかをはっきりさせる」という授業スタイル
- B 「深く真剣に考えさせる」という発問スタイル
- C 「子どもと共にゆっくりしていく」という板書スタイル

これは、IEA（国際教育到達度評価学会）が示すカリキュラムの3つのレベルに合致すると思う。

Aは意図したカリキュラム、Bは実施したカリキュラム、Cは達成したカリキュラム、ということになる。

要するに、

- (A) 何をしようとしたか
- (B) 何を指導したか
- (C) その結果、子どもたちは何を学んだか

は、常に頭に留めておかねばならない観点なのである。

どんなに計画（A）が立派でも、指導（B）がきちんとなされていなかったら、方法がよくなかったら、子どもたちの実態に合っていなかったら、その計画は台なしである。しかし、どんなに本時がうまくいっても、子どもたちが得る学び（C）は、質も量も人それぞれである。100ある内容を、学級の子どもたち全員に100定着させるのは、道德教育においては無理である。

国語や算数ならば、学習内容がはっきりしており、これができれば100点という目標設定を明確にもつことができる。100点を目指す授業ができるわけである。しかし、道德教育のように心を扱う学習の場合、そうはいかない。「全員が同じことをしなさい」と言われても、口先だけ、見せかけの行動だけならばできるかもしれないが、心の中では様々な葛藤がうごめくだけであろう。

では、道德教育は子どもたち全員に教えるべき、伝えるべき内容を何ももたないのであろうか。それは否である。

T君は、本授業の学びを、

苦手をみがく。得意をさらにさらにみがくことが大切でした。

と、自分の言葉でまとめている。

これはT君の＜（C）その結果、子どもたちは何を学んだか＞である。他の子どもたちは別の言葉で語るであろうし、授業後の実生活にどのようにつながるかも人それぞれである。その中でT君は、「このことを考えて6年生になってみせます」と、高らかに宣言しているのである。

道德授業で「決意表明をさせてはいけない」と、よく言われる。それはもっともなことであろう。無理矢理価値を押しつけるような授業スタイルは、戦前の「全員右向け右！」的スタイルを連想させる。それに対するアレルギーをもつ方も多かろう。しかし、だからといって、子どもたち自身が自ら自分の生き方を考え、自分の意志で「こうしたい」「ああいう生き方がしたいなあ」「こういう人になりたい」と思うように授業を展開することも不可なのであろうか。それは違うであろう。

つまり、教師が決意表明をさせてはいけなけれど、子ども自身が自ら決意表明することは、むしろ歓迎すべきことなのである。それを、授業ス

タイルの表面的な動きだけをとらえて、「決意表明はよくない」と定義してしまうから混乱するのである。

実は、このような“タブー”は、道德の授業スタイルの中に数多くあり、そのほとんどで言葉だけが先走ってしまっている。なぜいけないのか、よい場合もあるのではないか、という本質論が抜け落ちているのである。

私は、道德授業論は、「こういうときはどうするか」という方法論ではなく、「こういうときはどうあるのが人間なのか」という本質論で語るべきであると考えている。

そのような本質論で物事を考えるとき、どのような資料であっても、どのような内容項目であっても、どのような個性や体験をもつ子どもたちであっても、「ああ、わかった!」とか、「この人かっこいいなあ!」とか、「自分も何かできそうだな!」などというように、自己の生き方を前向きにとらえ直す共通項を見いだすことができるようになる。少なくとも私は、それを数多くの道德授業の実践の中から実感している。

人間には誰にでも「生まれながらのよさ (innate goodness)」があり、それを生かすことができたときに喜びを感じ、もっと伸ばしたいと願うのである。それを授業の中で子どもたちと共有したいと思う。それができたとき、子どもたちは「人間ってすごいなあ」「自分たちもこれから何ができるか楽しみだなあ」というように、道德的価値を前向きにとらえるようになり、そのような価値をもとに、よりよく生きる主体となるであろう。

そのような授業を求めて、我々教師は日々、子どもたちの前に立ちたいものである。



▲「内村航平」の板書

資料の力で授業がかわる。子どもがかわる。

～働くよさが、「よりよく生きる」をのばす低学年の実践～



岐阜県可児市立広見小学校 竹井 秀文

1. 低学年の実態と主題について

今回は、2年生「わたしたちもしごとをしたい」の資料（光文書院）を使い、内容項目4－（2）「働くことのよさを感じて、みんなのために働く（勤労）」の実践を紹介する。

低学年の児童は、教師に言われて働く、他律的な姿が多くみられる。しかし、「働くこと」への抵抗はなく、楽しく働き、互いに喜び合うことができる姿も多く見られる。

1年生では、家族や先生のお手伝いとしての「仕事」が多い。家族や先生に褒められることを喜びにして、手伝いに進んで取り組む姿が見られる。

2年生になると活動の幅が広がり、校内や学級内で様々な仕事をしている。日直、班長や掃除、係活動など多くの仕事を行い、働く経験も豊かである。また、仕事の内容や質に応じて、創造的に働いている姿もたびたび見られるようになる。

そもそも働くとは、以下の4つの意義がある。

経済的意義・文化的生産的意義・社会的意義・人間的意義である。この4つの意義に気づき、そのよさを感じ取ることで自ら働いていこうとするよりよい生き方を学びたい。

つまり、働くことの意義やよさを理解し、働くことの喜びを感じ、自ら働いていこうとする意欲をのばすために授業を仕組みたい。

2. 資料のあらすじ

となり町が震災になり、町の大人たちは、となり町へ救援に行く。町には、大人たちがいなくなり、残された子どもたちは、自分たちに何ができるのかを考え、進んで働く。町にもどってきた大人たちが、その姿を賞賛する。その後も、子どもたちは、町のために進んで働くことができるようになるというすばらしい資料である。働くことの意義やよさが十分に感じ取れる資料である。

3. 指導のねらい

以上のように考えたとき、本時のねらいは「働けば、まわりの人が喜んでくれたり、自分もいい気持ちになったりすることがわかり、係などの仕事をしっかりしようと思うようになる」とした。

具体的には、以下の4点である。

- * 人のために働けば、まわりの人が喜んでくれるだけでなく、自分もうれしくなることがわかる。
- * 人のために働いている人を見て、「立派だなあ」という気持ちをもつことができる。
- * 働く体験を想起して、「何かよいことをしている」ということに気づき、自分にも進んで働くとする心があることに感じ取る。
- * 人のためになる係などの仕事を進んでするようになる。

4. 指導略案

学習活動	指導の方法
1 人はどうして「働く」のかを予想する。	○「働く」ことについての今の自分の考えを言わせる。
2 「わたしたちもしごとをしたい」を読んで話し合う。 ・ あらすじを聞く。 ・ 3頁目の絵を見て、町の人々は、何といって拍手をしているかについて考え、話し合う。 ・ 4頁目の「だって」の続きの□には、どのような言葉が入るかについて考え、話し合う。	○拡大した絵を、順番に提示してどの場面か聞きながら、ていねいに説明する。 ○3頁目の絵を示して、褒めてくれている大人の声を考えさせる。
3 人はどうして「働く」のかという自分の考えをみつける。	○全員の子どもが書き上げることができる時間を確保する。 ○資料から学んだことをもとに、もう一度問い返して自分なりの考えをみつける。

5. 指導の実際

(1)導入

導入では、「はたらくって□□」と板書し、□□の中に何が入るのかを考えた。子どもたちは、

- ・はたらくって、すばらしい。
- ・はたらくって、いいこと。
- ・はたらくって、ありがたい。
- ・はたらくって、すごい。
- ・はたらくって、大切。



とはたらく「よさ」をみつけることができた。

その後、やんちゃな子が、

- ・はたらくって、めんどくさい。
- ・はたらくって、大変だ。

という発言をしてくれた。このような発言は、大きなチャンスである。教師は、その発言に対して「そうだね。めんどくさいし、大変なのはどうして人は働くのだろうね。」と投げかけることで、子どもたちに働くって何だろうという問いをつくるのできるのである。このような導入をしなければ、資料のよさを引き出すことはできない。

(2)展開

「どうして働くのか」という問いかけに対して、ほとんどの子どもたちは「お金のため」とこたえる。それは、当然のことである。だから、「働いているのは、お金のためだけかな」という問いができるし、「お金のほかに何かみつけれられるかな。」といった観点をもたせて資料を読ませることができ

る。この資料のよさは、書き込みができることである。このような資料は、子どもたちも教師も助かる。資料を読んだ後に、じっくり書く時間を取り、お金（ごほうび）だけではない「働くよさ」を考えて見つけることができる。教師はそれを板書で整理していけばよいのである。

子どもたちは次のようなことを書いていた。

- ・みんながうれしいから、もっと続けたいんだもん。
- ・みんなの笑顔でよりよい町にしたいんだもん。
- ・町中をきれいにするとみんなの笑顔が見られるのがうれしいから。働いたことが宝物だよ。

(3)終末

終末では、お金を稼ぐことも大切であることをおさえた上で、以下のような発言があった。

- ・人のためやみんなのために働くから楽しい。
- ・自分にしかできないことや自分のため、自分をいか

すから楽しい。

さらに、「はたらくからできるものもあるよ。」と発言が続き、「何ができるの。」と問い返すと、「未来ができるよ。」と教師もびっくりの発言を聞くことができた。そして、「人の幸せのためにはたらくことが大切だよ。」と子どもたちが授業をまとめたのである。



最後にもう一度、「はたらくって□□」の中を書かせた。次のようなことを書いていた。(70以上の言葉から抜粋)

- ・はたらくって、みんなの幸せをふくらませることだ。
- ・はたらくって、みんなをえがおいっぱいにするんだ。
- ・はたらくって、つかれるけど、みんなとやると楽しい。
- ・はたらくって、自分も喜ぶことができる。
- ・はたらくって、心を成長させることだ。
- ・はたらくって、なかまのために考えてつくりだすことだ。
- ・はたらくって、自分も人も気持ちが温かくなることだ。
- ・はたらくって、生活をよくすることだ。
- ・はたらくって、みんながわくわくすることだ。
- ・はたらくって、自分で進んで動くことだ。
- ・はたらくって、汗をかけばかくほど、笑顔になることだ。
- ・はたらくって、人のことを思って仕事することだ。
- ・はたらくって、みんなのよろこびをふくらませ、みんなのために、がんばってやること。そして、人が「ありがとう」と思うようなことをやることだ。

最初の言葉と比較していただきたい。授業による子どもの成長が見える。この授業後、子どもたちの働く姿も、いきいきとした。資料に力があるので、日常生活につながる道徳授業ができた。資料の力で授業もかわれば、子どももかわるのである。



情報モラルと道徳② ～資料とのコラボを考える～

石川県小松市立能美小学校教諭 北川 忠



1 情報モラルと「著作権」

光文書院『ゆたかな心』5年生のコラム「だれの研究？」では、情報モラルとして著作権について取り上げている。5年生にもなれば、著作権ということばを聞いたことはあるはずだ。インターネットを使って調べ学習を経験している児童も多く、その際に画像や文書を勝手にコピーしてはいけないことや、参考にする場合は出典を明らかにするという指導もされている。しかし、「著作権とは何か」という問いに正しく答えられる児童は少ないように思う。先に述べた「勝手に使用してはいけない」などの禁止事項を著作権と勘違いしていることがあるからだ。著作権とは権利であり、権利の内容は権利を有する者からの視点で語ってこそ、その内容がわかる。ならば、著作権の正確な理解を図るとともに、権利に関わる内容項目「4－（１）権利・義務」について考えるコラボ学習を計画してはどうかと考えた。

2 コラボする資料「救急車」

救急車を使用する権利はだれにもある。しかし新聞に掲載された記事によると、救急車をタクシー代わりに使用する人がいるために、本当に必要とする人が使えないことがあるそうだ。資料「救急車」（光文書院・5年生）は、この記事がもとになっている。権利の行使方法について考えさせるには良い資料だ。だれもがもてる権利である「著作権」を導入に使い、救急車で権利の行使について考えさせ、権利に伴う義務にも気づかせるという流れを作り、ねらいを次のようにたてた。

ねらい

- 自分の権利だけでなく、他人の権利も大切にすること。
- ・著作権について理解する。
- ・救急車をタクシー代わりに使うことの是非について考える。
- ・自分の権利を主張すると、他人の権利を奪うこともあることに気づく。
- ・権利には同時に義務も発生することがわかる。

- ・自分の権利は守られるべきであるが、権利を主張するときは他人の権利を奪うことにならないかどうかよく考えて行動しようとする。

3 授業の流れ

まず、「著作権」について、「自分が作った作品を他人に勝手に使われない権利」とであると定義し、この権利はだれもがもてる権利であり、なおかつ法律によって守られていることを確認しておく。権利ということばがわかりにくいと思われる場合、「使える資格がある」とことだと言い換えてもいいだろう。つまり著作権とは自分だけが使う資格があるということになる。ここから、「人の製作物には作った人の著作権があり、勝手に使えない」ということを理解するのに支障はないだろう。そこで、だれもが使用する権利がある救急車を登場させる。

資料を読んで、タクシー代わりに使う人に対して考えさせれば、「自分勝手だ」「自己中心的だ」などの意見が出る。そこで、「でもタクシー代わりに使う人にも使う権利はあるよね」と、権利を盾に揺さぶりをかける。すると、「権利だからといって本当に必要な人のことも考えないで使うのはおかしい」と気づくだろう。つまり、自分の権利を主張することで他人の権利を奪ってしまう場合があるということに気づくことができるわけだ。

さらに、「このような権利を主張するときには気をつけた方がいいことは何か」と問えば、本当に必要な人の権利を奪っていないかどうかを考えねばならない「義務」があるということにたどり着く。

4 権利と義務

「著作権」と「救急車の使用権」という二つの権利を扱うことで、自分の権利も他人の権利も大切にされなくてはならないこと、そして自分の権利ばかりを主張しては社会が成り立たないことを学ぶことができる。権利と義務の指導には、この資料をセットで指導してみてもはどうだろうか。

「人間関係づくりの演習と道徳⑦」

～2年「あいさつって なあに」*から～

千葉県習志野市立谷津南小学校 松田 憲子



1 あいさつに親しみ、意欲づけをする

今回は、低学年であいさつに親しみ、進んであいさつをしようという意欲づけをする道徳授業を紹介する。演習を取り入れ、あいさつのキャッチボールを体感させて、明るく楽しい授業となった。

2 授業構成の工夫

1年生1学期の実践のため、以下の3段階で、あいさつの心地よさを体感できるように構成した。

① 資料から「あいさつの力」に気づく

まず資料*をもとに、あいさつによって変化する主人公の気持ちから、あいさつの力に気づかせた。資料のさし絵を拡大し、黒板に提示した。



「あいさつすると、自分も元気になるし、みんなも気持ちがいいね」「『ありがとう』って言われると、すごく元気になるよ」「あいさつすると友だちも増えるんだ」等、場面ごとの主人公や周囲の人々の気持ちの変化を考えた後に、主人公の「あいさつっていいね。あいさつって……」に続く言葉を発表し合った。「うれしいね」「元気になるね」「気持ちがいいよね」……。すると発表を聞いていた子が「あいさつってすごいね。すごい力がいっぱいだ」とつぶやいた。その言葉に学級のみんながうなずき、「そんなあいさつをみんなもしてみよう」と次の段階に進んだ。

② どんなあいさつがあるのかな

「他にはどんなあいさつがあるかな」と問うと、「さようなら」「いただきます」「いってきます」など次々あがった。それらを整理し、あいさつには、「おはよう」のように互いに同じあいさつをするものと、「いってきます」「いってらっしゃい」のように違うあいさつをするものがあることに気づいた。カードに書いたあいさつを見て、「毎日たくさんのあいさつをしてるんだね」と改めて驚いていた。

③ 「あいさつカルタ」であいさつしよう

「みんなもあいさつパワーをこめて、あいさつしてみましょ」と、各グループにカルタを配った。カルタは読み札・取り札が各10枚。それぞれにあいさつが書いてある。読み札と取り札が同じものも、違うものも取り交ぜた。中には「ごめんなさい」という読み札も。『「ごめんなさい」って言われたら、なんて答える?』と問うと、「いいよ!」と一斉に言う子どもたち。「相手が心をこめて『ごめんなさい』って言ったら、そう答えてあげてね」とカルタを始めた。



ルールは、読み手が読んだカルタに対するあいさつを取り札から選んで取る。その際、必ず元気よくあいさつをする約束である。



各グループから元気のよいあいさつが教室中に聞こえてきた。だんだんテンポが速くなり、「おはよう」「おはよう」「ごめんな」「いいよ」……ぼんぼんと飛び交うあいさつ。クラス中のみんなが元気にあいさつを交わすことができた。カルタ取りを終えた後、「さっき、じゅん君(主人公)は『あいさつっていいな』って言ってたけど、みんなはどう?」と尋ねた。「これからあいさつをいっぱいしたい」「もっと他のあいさつもしたい」と、意欲的な発言が続いた。いつもはおとなしい子の「恥ずかしくなくなった」という感想には、私もうれしくなった。

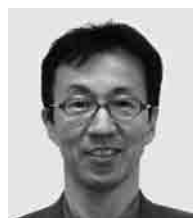
3 「心のキャッチボール」を体感する

あいさつはキャッチボール。すてきな返し方で笑顔が広がる。あいさつは笑顔が広がる心のキャッチボールだと子どもたちが気づいた実践であった。この「あいさつカルタ」を活用し、「神経衰弱」などをしながら楽しくあいさつの仕方を学ばせるのもよい。

*『ゆたかな心』(光文書院)掲載資料

参考文献: 秋山里和『「あいさつかるた」で考える挨拶の大切さ』(『道徳教育』2013年5月号/明治図書)

感謝できる人間になるための道徳授業



筑波大学附属小学校教諭 加藤 宣行

1. 「石油列車、東北へ向かって走れ！」

(光文書院・4年生)

本資料は、平成26年度版の改訂のため新たに作成されたものである。東日本大震災のときに東北へ石油を運んだ貨物列車のエピソードをもとに、人々がどれだけ力を寄せ合い、たがいに支え合って復興に臨んだか、その努力の一端を垣間見ることができる資料である。

このような陰の努力、私たちの支えになってくださっている人々の存在を知れば知るほど、「すばらしいな」「ありがたいな」「感謝の気持ちを忘れずに、自分たちにできることをがんばっていこう」という気持ちが生まれる。そして、自分の心に生まれた、支える人々への尊敬の念と感謝の心に気づき、感動し、生きる意欲をかき立てられるのである。

2. 内容項目について

本資料は中学年向けに書かれたものであるが、本時では5年生対象の授業に使用した。中学年と高学年では当然ねらいの設定が異なるため、自ずと展開も違ってくる。

ちなみに、「尊敬・感謝」の内容項目について、学習指導要領解説にはそれぞれ次のように書かれている。

第3学年及び第4学年の内容

2-(4) 生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。

第5学年及び第6学年の内容

2-(5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。

中学年には尊敬という言葉が明記してあるのに対し、高学年ではそれが無い。また、中学年の語

尾は「接する」であるのに対し、高学年は「こたえる」となっており、自分自身の行動により踏み込んだ記述となっていることがわかる。

では、低学年はどのような記述になっているだろうか。

第1学年及び第2学年の内容

2-(4) 日ごろ世話になっている人々に感謝する。

このように三つを比較すると、低学年・中学年・高学年が、「感謝」-「尊敬」-「感謝」というステップになっていることがわかる。そして、その対象が、身近な人々から高齢者へ、そしてもっと広い社会へと視野を広げていくようになっている。

だからこそ、前述したように展開は学年ごとに異なってしまうべきである。

ただし、展開が異なるといっても、本資料の描く本質的な人の心は同じである。それは、危機的な状況に陥っている人々のために、身を粉にして働く人がおり、そのような直接は見えない人々の努力に支えられて社会生活は成り立っているという事実である。資料では、主人公の目を通して、身近な父親から、父親の周囲で働く人々（見えない人々）へと視野が広がっていく。子どもたちにも資料を通してそれを体感させたい。

さらに、こういった事実は、震災時だけの話ではない。子どもたちには、よく考えたらそのような人々は、自分たちの身の回りにもたくさんいるのだという事実認識に至らせたい。

そのような知的な理解が深まり、広がってこそ、はじめてそのことに対する気づきは大きな感動となって子どもたちの心に広がる。心を動かされることで、自分を支えてくれている人々に対する尊敬と感謝の念をもちながら、謙虚に生きていこうとする態度が育つであろう。

本時では、高学年に対して授業を行うわけであ

るから、資料には登場しない、直接自分に関わってはいない支える人々に対しても思いを馳せるような展開を試みたいと思い、挑戦した。

3. 本時のポイント

本時では、主人公の変容に着目させたい。主人公が気づいたものは何だったのかをキーワードにして、そのような見方をしたときに「あまり意識していなかったけれど、ありがたいことだ」と、自分たちの身の回りにいる人々への思いが深まったり、「ああ、こんな人もいたんだ」と、まだ見ぬ人々への思いが広がったりすることをねらいとする。

4. 授業の実際

(1) 資料名 「石油列車, 東北に向かって走れ！」

(『ゆたかな心』光文書院・4年生)

(2) 内容項目 2-(5) 尊敬・感謝

(3) 本時の展開



T: 資料の主人公「さとし」はどう変わった?

C: 最初は、貨物列車より新幹線の方がいいなと思っていたけれど、お父さんは人を助ける仕事をしていてカッコいいと思うようになった。

C: 貨物列車に対する気持ちが変わった。お父さんの話を聞いて、カッコいいのは外じゃなくて中だということがわかった。

C: さとしは中を見られるようになった。

C: 「ヘッドライトが希望の光に見えた。みんなの力が合わさって石油を運ぶことができた」と書いてある。みんなが協力しているところがカッコいい。

C: お父さんが運転士に対して、がんばって運転してくれて(東北に石油を届けてくれて)ありがとう、と思っている。そういう「ありがとう」があるということに、さとしも気づいた。

T: さとしは最初は知らなかったけれど、お父さんの周囲には石油を運ぶために協力した人がたくさんいたのですね。

C: いろいろな人が石油を運ぶためにがんばっていた。人のために思う強い心を使っていた。

C: みんな、自分の強い心を支える心を精一杯使

っていたと思う。

C: それがわかったから、さとしは外見だけでなく、内面も見erようになった。物の見方が変わってきた。

T: 見方が変わったら、見えなかった人が見えてきたのですね。

C: そうしたら、定型文の「ありがとう」ではなく、心の中の感謝の気持ちが自然に「ありがとう」につながる。気持ちがこもるようになる。

T: なるほど、口で言うだけの「ありがとう」が、心からの「ありがとう」になったわけだね。そういうありがとうが言える人ってすてきですね。みなさんの周りにも、そういう「ありがとう」を言いたい人たちがたくさんいるのではないかな。どんな人が思い浮かぶかな。思いついた人、黒板に出て書いてごらん。

(子どもたちは黒板に出て、思い思いの人やものを書き始めた)



T: こういう、たくさんの人やものに支えられて自分たちは生きているのですね。そして、あなた方も周りの人の支えになっているのですよ。今だったら□の中(□にありがとう、と板書)に何を入れますか?

C: ありがとうにありがとう!

C: つけ足し。「すべてのありがとうにありがとう」。

T: これからもすべてのものに感謝しながら生きていきたいですね。終わります。

5. おわりに

私が秀逸だと思ったのは、「定型文のありがとうに気持ちがこもる」という発言であった。人の支えのありがたさがわかる人間のみに許された、高度な感謝の言葉である。これをきちんと使うことのできる人間になりたいと、私自身も心から思うことができた。

これこそが、ちょっとすてきな自分に会おう道徳の時間の醍醐味である。道徳の時間は、そういうすてきな時間でありたい。